

‘Cognate Object’ について (XIV)

——意味論的・文体論的研究——

Notes on Cognate Object (XIV)

——A Semantic and Stylistic Study of Cognate Object——

倉 田 達

Tatsu Kurata

I.

Cognate Objectの動詞と目的語との結合に関しては、動詞singは自動・他動両用ではあるが、他動詞としての性格の強い表現sing a songは、自義表現として成立し、伝統語法の中でも最もS + V + Oの型に近い。singには自動・他動両動詞があるが、この場合は含有されている相関概念が表現の形をとったものであると思われる。然し同じ伝統語法の動詞にしてもsleep, live, die, dream, runについては自動詞としての意味が強く、従って名詞としてのsleep, life, death, dream, raceは無くても自義的表現として成立しないことはない。これらの自動詞としての性格の強い動詞が次に同族系の名詞を取るのは、発生的には英語古来の頭韻や脚韻の力に依って結合力を助成したであろうことは想像に難くないが、同時に結合することによりS + Vで直格となり、更に動詞と同族系の名詞は結合することにより斜格として影じたものであると考えられる。¹⁾ 伝統語法は長期的に亘り使用されその語法としての力と新鮮さとは或る程度失われていることは否定できないにしても、この安定した語法を中心として多岐にわたる類似表現には、これらの安定した型から転用いと進んだ臨時語法には特に結合上の意味を持っていたと思われ、その力は大きいと考えられるのでこの点については臨時語法を観察するのが適當であろう。

Cognate Objectの目的語は抽象名詞であって、その抽象名詞は実質名詞のように視覚を通しての心的形成はないし概念として把握されているにすぎないので副次的実体表象で共義的であるので内容を感じ覚的に捉え簡単に扱うには便利である。²⁾ 従って自動詞としての意味の強い動詞と結合して自義的表現として成立する。その場合、斜格として影じた名詞はS + Vという直格に対し類似概念である程度の反(重)複がみられ、印象・強調という情的表現となってくる。従って作家は本人のもつ印象という心的現象・強調という情的表現をこの用法を通して読者に同一もしくはそれに出来る丈近いものを喚起せんと意図した表現であると考えられる。

安定した語法を基礎とした類似の多岐に亘る表現にはsing~songという伝統語法から転用したsectionのsubstitutionによる語法が比較的安定化の方向にあるが、こうした現象は少数の形式で多様の意味を表現しなければならないことから起るのであるが、安定化の方向にあることは原型の価値を高めていることにもなる。同じ創造語法を作成するにしても安定した伝統語法の型には促らわれないで、その動詞と名詞の意味が類似であるという原理を応用しての作成法が用いられ、それに該当する代表的なものにwing~flightがある。

Cognate Objectは一般的に云って、①同(類)音反覆に依り外部感覚を刺激に依って訴え、②類似意味の重複は意識の喚起を促進し特異の表象の形成を促すものであるが、①②同時の場

合と②のみの場合とがある。……a crow winging its solitary flight……に於ては、この例は後者に属していて、wingingは意味上のsubjectであるa crowに内属し一つの判断を形成し、flightはsubjectに対する相関関係の斜格として促えられているに過ぎない。然しこの場合の斜格としてのflightを用いることに依ってvividな写実的文章となり鮮明な印象の強化という効果をもつことになる。solitaryはflightの属性ではあるが、主人公との同一感性であることを示し共義的なflightは意図的繰返しの使用による優れた表現である。

この表現を更に詳説すると、同語反覆という語法の類推に依り、創造語法作成法としての可能性を最大限に発揮したものとしてのこのW. Irvingのwinging a solitary flightという語法は普通の結合法なら想定上はfly~flightとなるのであるが、動詞と同族系の名詞との結合に依る印象強化という心理過程の可能性を見事に生かすのに、更に一段と発展させて動詞 fly を wing と置き換えることによってflyよりも概念が豊富となり鮮明な視覚的描写に依り印象の強化を狙ったこの表現法は最も優れた表現と云い得るであろう。創造語法作成に当たっての語彙選定が重要な役割を果すことを示す好例であり、思想内容、感情が多岐であるので、伝達するのに既得の定型語法（同属系語彙の反覆）を基礎としての類推作用で形成されることは勿論であるが、その場合、高度の工夫がなされていることが感得される。

動詞wingは①一地点に止まったの運動か②或いは飛行中に於ける動作かのいずれかであるので、それを規定する必要に迫られてflightは目的語として意味上の主語crowの相関関係で斜格として促えられている。形容詞solitaryは複数という数の相対的概念として把握されているだけでなく目撃者の直感による情感即ち主観による判断の精神内容が加味され、この形容詞には最も強力な精神の経験内容が示されていて、名詞flightの表象の帰属的限定となり、flightは此の形容詞に依ってより豊富な概念規定を受け、更に直格としてのa crow wingingと帰属的に結合し、即ち直格表象と斜格としての表象の同一化が行なわれて文全体の意味が形成されている。

創造語法に於ては、語の結合関係は、類義語の間では自由で束縛もない。従って結合法には作成者の作成方法・意図・語と語との意味要素の結合による表現効果の意図が最も良く現わされて個性的表現となっている。伝統語法とは異り創造表現の卓越性は、語の結合に与えられた自由、その自由の駆使の方法如何にかかっている。この点からもW. Irvingのwinging~flightはfly~flightを想定し更に一步前進させ、動詞としてのwingはflyより意味が特殊化し意識の焦点はflyの一部の意味成分、即ちflyの下義関係にある「羽博く」の上に置かれ、更に名詞flightと相関関係にあるので、精細な描写が可能となり特異の優秀性を示す数少ない創造表現であろう。

創造語法の作成には

- ① 動詞と同族系の名詞から成立するという基本的原理を適用した方法（同一語彙内に動詞・名詞の両品詞が存在する場合は同語反覆となる）
- ② 定着した伝統語法のsection部分の語彙の入れ換えによる構成法

以上の二方法があるが、wing~flightはfly~flightという語法を想定した上で、更に進めた形成法即ち②の構成原理を適用した語法で、作成上は①から②へと進めた両方法を併せて採用した点で極めて珍らしく、その点で創造語法としては特異の形成法となっていて、散文の高度に発達した19世紀特有の創造語法と云え得るであろう。

II.

wing~flightと同じような結合上の規定は

① 伝統語法run~race, fight~battle (war)にも同様な現象は見られる。即ちrunは意味が広く、動作の主体となるものが単独か、複数か或いは競うことを目的とするか否か等の規定が必要となり目的語をとっているものと考えられる。即ち直格と斜格の同一化現象により文全体の意味が形成される。同様にfight~battleやfight~warの場合も同じで、動詞fightの主体は個人対個人なのか或いは双方複数かの概念規定を要求されて出来た結合であるが、いずれの名詞と結合するかは慣用上の問題か或いは作者の意図でしかない。動詞を規定するという点で創造語法wing~flight, fight-war伝統語法run-race, fight~battleは同じ範疇に属する。

伝統語法sing~songからsubstituteして出来た語法は原型より狭義であるので、名詞を入れ換えれば、その名詞は動詞を規定する。但し動詞・名詞共に置き換えると相互に規定し合って、表わす意味はますます精密の度合を増すことになる。

② sing~song, say-word (或いはspeak~word) は含有されている相関概念が表現の形をとっての顕現である。伝統語法における同語反覆のdream~dreamは含意的のものが顕現されたとみるべきであろう。但しその点では、sing~songと同じ部類に属するけれども、含意の程度はsing~songより可成弱い。

③ live~life, die~death, sleep~sleepは意味上最も近い意味の動詞と名詞の重なり合いとなるが、「活動的」意味をもつ動詞意味のlive~lifeは長く良く用いられ、定着して安定しているが、「生命の停止」・「生命活動の一時的休止」という静的意味のdie~death, sleep~sleepは伝統語法の中でも使用度は最も低く、これらのdeath, sleep (n.) は夫々虚詞化の傾向にあるものと考えられる。②と③を併せ考えた場合、含有性の強い結合法は高い使用率を保っている。それに対し含有度の弱い結合法はlive~lifeを除いては概して使用度が低い。

④ 同一語彙に動詞・名詞の両品詞を含むものは同語反覆となり、意味の重複部分が最も大きい。その中でもsmile~smileは視覚的效果で印象を鮮明にすることが出来、創造語法のbutton~buttonに於いては、名詞buttonは物質名詞で、Cognate Objectの拡大された用法であり、視覚に依る印象形成の点では、smile~smileと同じ部類に入る。創造語法move~moveは「強調」という情意表現であろう。

同語反覆の語法は意味上は最も重複部分の広い範囲となり、更に音声上は、同一音の重複でCognate Objectの数ある種類の中で、創造語法並びに用いられることの少ない語法は特に、印象化・強調現象喚起としては、最適の表現方法であろう。

以上のように結合法は、各語法によって様態は様々である。総じて鮮明な視覚的・絵画的表現は、印象を残させるのに適し、強調の場合は、音声上のstressの置かれるのは当然であるが、同(類)語反覆の形をとるこのCognate Objectは、視覚的要素のある時は、印象を主体とし、そうでない時は、強調の為に使われることが多い。頭韻や脚韻のような音の繰返しは、それ自体は何等の意味も有していないが、唯、関心を促す志向性を持ち、即ち意味活現に向って促進作用の機能を果し、意味の重複と相俟って印象強化及び強調という感情喚起の表現として使われる。

W. Saroyanの創造語法は、在来存在していた語法のsection部分の入れ換えに依るものが多いが、C. Brontëは、同語反覆か或いは、同一系統の語の繰返しに依る音の全部又は一部音の重複する用法が中心であり、伝統語法のsection部分の組み換えも併用している。伝統語法を基礎にして作成された創造語法の詳細・綿密にして鮮明な表現はvividな心的映像を作り、印象を目的とした直接の効果を目指とし、同語反覆は主に強調という感情表現につながるが多い。この反覆法は、同語反覆という音の繰返しによる強力な刺戟を与えることに依って、音調上の心理的效果をも併せ持っていて、一部音の繰返しは口調に依って語の結合関係を一層明確

にし、印象を刻明にしたり、或いは強調を意図する表現法である。

Ⅲ.

breathe one's last, sound sweetest, live the longest 等に於ては, breath, sound, life という名詞は省略されている。これら3種のCognate Objectは, (英)の19世紀にみられる用例である。³⁾英語に於ては, 或る語法が廃用になり, 長期間を経た後, 再出現する例はある。⁴⁾然し, 同一語法の再現でなく, J. Steinbeckは, 暫らく期間を置いてから, これらの語法の原理を転用して, swallow one's lastの創造語法を形成している。⁵⁾3種のCognate Objectは, 19世紀中頃に用いられ, 約半世紀後の19世紀末(1891) breathe one's lastが(英)の最後の用例である。それから約半世紀後の(1939)に(米)に於て, J. Steinbeckは, 過去の用法の再現でなく, 原理転用したものである。使用期間の比較的短い語法廃用後の原理の転用という点で非常に珍らしく, 而も, アメリカ英語唯一の例である。これはswallowという動作の繰返しの最後行動で, 動作の反覆は, それ以上ないという否定判断で, 名詞は明白であるので省略されたのである。

breathe one's last, sound sweetest, live the longest等のこれらの語法の特徴は, 形式的には, 動詞と目的語としての名詞との間の意味・音声上の反覆を伴わないことである。その上, 形容詞が最上級のみに限定されていることが, この語法の特徴である。最上級を伴う形容詞は, 省略された同族目的語に帰属し, その帰属の仕方は, breathe one's lastとswallow one's lastとは「息づかい」, 「呑み込み」の反覆動作とその回数との関係を示し, 観察による判断である。sound sweetest, live the longestの最上級は, 判断による相関関係の形容詞であり, sweetestは音響効果上の価値判断, longestは, 生活上の期間に対する判断である。換言すれば, 最上級としての形容詞の次に来る名詞に対する規定度合は, 最高度に発輝された場合である。従って, 形容詞としての意味範囲に於て, 余剰の部分を解釈上残していないので, 意味は最高に明確性を有し, 一点の誤解も許さない。従って, 準備表象として明確になる名詞は省略され, 斜格として影じてくる。それは, 動詞と名詞との意味範囲が, 極めて良く似ていることによるものである。即ち, 形容詞としての意味は最も顕著に現われてくるので, 名詞は略されても, 動詞に依って充分補われていることになる。

動詞・形容詞(最上級)・名詞(省略)の三箇の部分の中では, 最上級としての形容詞が, 意味上stressは強いので, 名詞を省略することに依り, 明確・簡潔を主眼としたリズム・カルな協音調の連続となり, 力強い表現にすることに依り, 一段と最上級の形容詞にprominenceをもたせることができ, 印象力強化に寄与している。

Ⅳ.

Cognate Objectは, 古代及び中世紀時代, 頭韻の全盛期に, その波にのって発生し, 更に, 欽定英訳聖書に於ける数多い重複表現の影響を受け乍ら, 英語伝統の一つとして, 後世まで続いたものと思われる。発生の当初は, 恐らく, 音韻の影響が大きく働いて発展し, 後世に至り, 思想が複雑となるにつれ, 多くの表現の必要性に迫られ, 安定した伝統語法を中心としてsubstitutionに依る数多くの表現形式の発生を促進し, 複雑な心的現象を表わすのに用いられるようになったものと考えられる。英語は史的発達過程に於て, 常に精密表現を目標に発展してきている。語尾消失に伴い, 語順の確立, 前置詞の発達, 関係代名詞の発展, 更に, 'tense'に

みるように、O. E. では、現在形、過去形の二形式の存在であったものが、後に、未来完了、現在完了、過去完了の諸形式、更に、助動詞 *will, shall* の発生を伴い、表現上精密の度を増してきている。これらの発達を促したものは、精密表現を求めての言語活動にはかならない。Cognate Object の創造語法も、同じく精密表現を目標として、形成されたものである。現在の英語は、口語化が進み乍ら、他方に於て、表現力として常に精密の方向に動いていることは、Cognate Object の創造語法に良く表現され、現在の英語が、在来の精密表現形成力という優れた点を保持しての口語化進行であることを示している。然し乍ら、精密度の濃い代表的創造表現は、19世紀の用例であることは、注目すべきことであるが、今後の創造表現は、新しい同(類)語反覆か、或いは、既成の伝統語法の *section* 部分の入れ換えによるものであろう。

V.

Cognate Object は、*object* なしで、自動詞で単独で使われる時は、意味上、一般的且消極的存在である。即ち、意味上は、内容を欠いているとみて良い。精細な表現をする場合には、一般的意味の Cognate Object より下義関係の、より狭義の語彙の選定を迫られることになる。

このことは、動詞・目的語いづれについても共通である。動詞及び目的語の、それぞれの *substitution* は、伝統語法としての広義の語彙との下義関係にある、より狭義の類義語というように、選択制限が自らあるわけであるが、狭義になればなる程、意味は鮮明となる。その点、伝統語法の動詞と名詞の意味は、最も広い一般的意味を有するものであるが、それらが、社会に定着して、或る場合には、*sing~song* のように、それを基本にして、類推による *substitution* に依って、表現使用の拡大を図ることが可能となり、英語のように、類義語の豊富な言語にあっては、その結合の仕方によっては、秀れた創造語法発生の可能性も出てくることになる。このような現象は、嘗て細かな表現を必要としなかった時期に発生・発達し、時期の進むにつれて社会に定着し、後世に至り、微細な表現を必要とする時、即ち、社会・文化の向上に伴い起る現象である。

精細・明確な描写法は、視覚的要素を有し、強力な印象を残そうとする効用が働き、音の反覆を伴う時は、意味が視覚性のもの以外は、主に情的に訴える表現であろう。頭韻・脚韻のような一部音の繰返しは、使用者の「強調」を意図する志向性がみられ、その点 C. Brontë は、とりわけ音の組合せに秀でていて、*disagreement of disposition* のような表現を作り、数多くの優れた反覆語法の作成に効果を挙げている。その一部音の反覆の拡大形と考えられる同語反覆に於て、*look~look* の如き創造語法に依って、強烈な感情表現として使用している。

動詞と名詞との同一系語彙の結合法という原理も幅広く利用し、創造語法としての特異性を良く表わしている。殊に同語反覆という意味・音声の二重の重複による創造語法を駆使して効果を最大限に発輝している。情的表現としての重複法を、C. Brontë は見事に使用した作家と云え得るであろう。更に、嘗て W. Irving の秀れた創造語法 *wing~flight* を、次に用いた英国唯一の作家であり、Cognate Object の巧みな表現を幅広く採用し、その結合語法により表わし得る可能性を最大限に発輝した作家である。作家としては、新しい新鮮な表現を求めての強烈な意欲を示した W. Saroyan も、Cognate Object の愛好家として、併記されるべきであろう。

VI.

簡云すれば、Cognate Object は、動詞と同族系の名詞との結合であって、根幹をなすのは、

伝統語法であり、これらは英語伝統の音反覆の影響に依り結合・発展したものと考えられ、後世に至り伝統語法を中心に、それらの模倣に依る派生表現が発生し

① 伝統語法以外の動詞と同族系の名詞との結合という新しい語結合法の作成を促進、創造し、主に「強調」という注意の喚起を意図した情的表現に主として用いられ、②上記①による作成より前進して、動詞或いは名詞の一方を下義関係にある別の類義語とsubstituteするか、もしくは、双方をsubstituteして、明細・精密な表現を意図するのに使われ、強力な視覚的印象に訴え、印象強化に効果を挙げている。

研究途上に於て、文法論と文体論とは、分離して行わるべきでないことを痛感した筆者は、方法としては、本研究に最も適切な、文法文体論を中心とした総合的考察を行った結果、20世紀の文語英語は、口語化を辿る一方、他方では、絶えず精密表現の希求が常に行なわれていることを、Cognate Objectの創造語法は、これを良く表わしている。今後も折にふれ、創造語法の発生を伴い乍ら、根強い伝統語法は、永く用いられ続くであろう。

註

- 1) 中島文雄『文法の原理』p. 69。
- 2) 中島文雄『文法の原理』p. 115～116。
中島文雄『意味論』p. 114。
- 3) 拙著『英文法論叢』p. 25～26。
- 4) 拙著『英文法論叢』p. 146。
- 5) 千葉大学教育学部研究紀要 第26巻p. 93。

参 考 文 献

- B. Jacobsen, *Transformational-Generative Grammar* (Second, Revised Edition)
 G. Leech, *Semantics*
 中島文雄『言語と思考』
 T. Nakao, *The Prosodic Phonology of Late Middle English*
 大塚高信『書誌学の道』
 G. Stern, *Meaning and Change of Meaning*
 H. Yamaguchi, *Studies on English Style*